

千葉県・敬愛学園高等学校 1年

福島健輔

「拉致から解放するために」

拉致問題、それを聞きあまり興味を示さなかった以前の私に羞恥心を感じました。

アニメ「めぐみ」を視聴し拉致され家族と会えなくなってしまった横田めぐみさんの恐怖や悲しさが一気に私を襲いました。そして拉致から40年経過した今に至っても訴え続けている横田滋さんと早紀江さんの必死さと心の痛みを感じました。アニメを見る前まで私は、返還を訴える拉致問題のニュースを見て「北朝鮮って悪いことしているな。」ぐらいしか思っていませんでした。拉致問題がどのようなものなのか、その悲しみについて私は触れようとしなかったのです。人として娘と会えなくなり、今でも努力し続けている人たちに共感しなかった自分が恥ずかしいと今は思っています。同時になにが私たちにできるか、それが日本に住む国民として考えるべきことだと思いました。

インターネットを使って調べ、出てきた情報は日本人以外の被害国でした。タイ、ルーマニア、レバノンの国々があがっており、拉致問題は国際社会全体の問題になってきていることを知りました。拉致問題がこのまま広がっていてもよいのでしょうか。解決方法として私が考えるのは世論に訴えて関心喚起することでした。しかし、この方法の難しい点はビデオを見ていなかった以前の私のように、興味を示さない人が多い現状であるからです。そこで私は、世の中の人々がこの問題にどうしたら興味が湧くか、有効な方法があるのか調べました。ジャーナリストの櫻井よしこさんが国際協調という言葉を挙げていました。それは外国の人たちに拉致問題のことを伝えることで拉致問題を国際的に解決することでした。私はこの方法はとても有効だと思います。多くの国民に伝えることにより、よりいっそう世界中の人々にこの拉致問題の悲惨さが認知される、と思いました。

私はこの問題を私が所属する弁論部において、弁論という形を通して伝えていきたいと強く思っています。身近な行動で拉致問題のことを広げていくことによってまず身近な人たちに関心を持たせることにしました。最近の日本はグローバル化が進み国際的になっているのを利用しながら「国際協調」につなげていけると良いと思いました。拉致問題は日本人の人権に係る重要な問題だと思います。家族が突然消えてしまう、そのことについて私たちは同じ日本国民としてもっと関心を持ち、横田さん夫妻の身になって自分のまわりのこと考えるべきではないでしょうか。家族に再び会いたいという思いに賛同する、そのことを自身のこととして考えてみる想像力が大切なのです。